

第6期 事業計画

1 研究関係

(1) 造礁サンゴ類の増殖に関する研究

研究所地先におけるサンゴ産卵状況調査

平成 15 年度より継続。夜間に潜水して研究所地先に生息するサンゴの産卵状況を調査する。

クシハダミドリイシ・エンタクミドリイシの生活史全域にわたる飼育

野外で飼育している幼群体は順調に育っており、水槽内で藻食性魚類等との混在飼育を検討。生残率や成長速度の向上を図る。また、閉鎖循環水槽での飼育を再開し、水質環境の詳細を調べる。

着生基盤の検討

種苗生産に都合のよい着生基盤の検討を継続する。

サンゴ種苗の開発

受精卵から育てた幼サンゴを、放流用種苗とするための方法を開発する。竹ヶ島自然再生の要請により、エダミドリイシを用いて実用をめざす。

造礁サンゴ類の生殖周期に関する研究

平成 16 年度は配偶子形成過程や生殖腺の発達と水温等の環境要因との関係について検討する予定だったが、悪天候と調査に時間を取られて何もできなかった。

クシハダミドリイシ幼体の栄養に関する研究

プラヌラ幼生期から幼体が秋期に褐虫藻を持つまでの期間、何を、どれくらい、どの様にして摂取しているのか調べる。

受精卵の冷凍保存法の開発

受精卵の冷凍保存法の開発を継続する。今年度は、培養細胞凍結の技術を導入する。

(2) ウミガメ関係

大岐の浜におけるウミガメ類の上陸・産卵状況の調査及び産卵環境の保全

土佐清水市大岐の浜におけるウミガメの上陸・産卵状況調査を継続する。また、ウミガメの産卵場としての環境保全の資料を得るために産卵及び孵卵環境の調査を行う。

ウミガメ情報ネットワークの発展

平成 15 年度に発足した「遊亀会」の会員を増やし、会員相互の情報交換を盛んにする。

大敷網に混獲されるウミガメの調査

日本沿岸を回遊するウミガメ類の生態を解明するための情報源として、定置網において混獲されるウミガメの甲長、甲幅を計測し、標識を装着して放流する。この情報は日本ウミガメ協議会に送り、再捕等があった場合には連絡が来る事になっている。また、死亡個体は解剖し、胃内容物等の標本作製する。

(3) 動植物相関係

大月町海域のサンゴ相調査

昨年度調査でわかった宿毛～土佐清水海域のサンゴ高被度域について、種組成を含めた

群集構造の解析に進む。

大月町海域の海棲動植物相調査
情報や標本の収集・整理に努める。

(4) その他

ウニを除去することによる藻場復元の試み

平成 14 年 10 月より継続。ウニ除去区では対照区に比べて藻類の生育量が増加しているが、以前みられたガラモ場が形成される様子はない。実験開始から 3 年になるので、まとめを行う。

ヒメアサリの産卵生態に関する研究

平成 13 年より継続。西泊地先に生息する二枚貝「ヒメアサリ」の生殖周期や生殖細胞の形成過程について、まとめを行う。

相模灘調査(ヤギ類)のまとめ

平成 14 年度より継続してきた国立科学博物館・相模灘調査実行委員会による相模灘調査とりまとめの年になるため、これまで採集された標本と文献や各地の収蔵標本を総合的に検討し、まとめを行う。

2 受託調査・事業等

受託予定事業は以下の通り。

(1) 平成 17 年度竹ヶ島自然再生推進調査

発注者：ニタコンサルタント(徳島県)

内容：徳島県が中心となって進めている竹ヶ島海中公園地区の自然再生調査において、エダミドリイシ増殖技術の検討とモニタリングに用いる海中公園内のサンゴ等分布状況マップの作成を受託予定。

(2) モニタリングサイト 1000 (サンゴ礁海域モニタリング事業)

発注者：自然環境研究センター

内容：環境省が行っているサンゴ礁海域モニタリング事業のうち、四国沿岸について、担当している。

(3) 平成 17 年度竜串地区自然再生推進計画調査

発注者：環境省

内容：竜串湾のサンゴ群集を中心とする生態系再生方策を策定するための調査。継続モニタリング調査及び造礁サンゴ類増殖技術の検討を受託予定。

3 啓蒙・広報活動

(1) 和文機関誌「CURRENT」の発行継続(季刊：4, 7, 10, 1月)

(2) 紀要「Kuroshio Biosphere」の発行継続(年1回)

(3) ホームページの活用(情報公開を含む)

(4) 第四回黒潮生物研究所サマースクール開催(小学生対象)

(5) 第三回黒潮生物研究所中学生サマースクール開催

4 助成金の創設

- (1) 応募資格：卒研究生、大学院生、その他の研究者
- (2) 助成内容：研究費の補助
- (3) 助成金額：10～20 万円程度 / 件
- (4) 応募要領：在學生は指導教官の推薦必要。一般は自薦、他薦の推薦必要。
- (5) 選考方法：理事 / 評議員に回覧し、点数制で助成順位を決める。
- (6) 助成の成果：成果物(論文等)を財団の業績とし、「CURRENT」、「Kuroshio Biosphere」等に掲載する。また、年度末の理事会と連動させ、スポンサー企業であるステラケミファ(株)の社員にも公開して発表会を催す事を検討する。
- (7) H17 年度を初年度とし、初年度は 100 万円程度で始める。